反障害通信

25．７．３　　175 号

障害の関係論への転換のために！
――障害関係論原論の「はじめに」として――

わたしは、2010 年に『反障害原論――障害問題のパラダイム転換のために――』を出した後に、というより、執筆中にタイトルに矛盾を感じていました。「反障害」という突き出しが「障害の社会モデル」（註１）的になっていました。わたしは既に障害関係論を突き出していくことを考え、しかも医学モデルから「社会モデル」の転換は果たしてパラダイム転換と言い得るかどうか、障害関係論こそがパラダイム転換（註２）と言い得ることだという思いをもっていたからです。

もしわたしの思いをストレートに表すとしたら、『障害関係論原論――障害問題のパラダイム転換のために――』とすべきでした。

ですが、障害関係論を突き出すには、哲学的押さえなしには困難であり、それを深化させ広めていくことの難しさを痛感していました（註３）。それに、その転換の過渡にあると押さえていた、そしてそもそもの、それなりに理解が広がっていた「障害の社会モデル」自体が、ゆらぎの中にありました。それはイギリス障害学から来ていることとされていました（註４）が、第１世代のイギリス障害学は、第２世代と言われるひとたち（註５）から既に批判に曝されていました。で、反論・再批判（註６）も出てはいるのですが、きちんとした深化と広がりをもちえていません。丁度、その頃を前後して、従来在ったＷＨＯの障害規定のＩＣＨＤＨの改定作業がなされ、そこで出されたＩＣＦがあり、そのＩＣＦ自体が、わたしに言わせればまさに「社会モデル」的転換にさえ失敗したのです（註７）。だからこそ、なおも議論の整理・深化が必要とされていたのですが、障害者権利条約の議論では、このままでは条約自体の成立さえできなくなると、「障害規定をしない」ということで進められたのです。さて、結局、障害者権利条約は結局「医学モデル」の枠に引き戻されています。

「権利条約」批准のために日本でおこなわれた「障害者」関連法案の‘障害’‘障害者’（註８）という語が医学モデル的に使われているか、「社会モデル」的に使われているかを逐一とらえ返すと、詞と「社会モデル」を説明する語以外は、医学モデルでしかありません。

で、そもそもなぜ第１世代のイギリス障害学が「社会モデル」を突き出したのか、その意味と意義、そしてその論理的深化をさまたげていることを、どう・どのように超えるのか、を押さえなくてはならないのです。それは、1970 年代に発達保障論という抑圧的論理に「障害個性論」を突き出したこと、それは、「社会モデル」の立場からも誤りとして指摘できることなのですが、過渡的な意義があり、そのことを押さえていたこともありました。

そういうところで、とりあえず「社会モデル」を過渡的に徹底させるというところで、「障害の社会モデル」的な押さえとして、本のタイトルを「反障害」という「社会モデル」的

突き出しにしたのです。

さて、医学モデルへの引き戻しとしての「障害の社会モデル」批判以外にも、どのような批判がでてくるのか、ということを考えねばなりません。例えば昨年８月に亡くなった日本の「精神障害者運動」を引っ張った山本真理さんが「障害の社会モデル」批判をしていました。どのような内容の批判か確認しきれませんでした。

そもそも、イギリス障害学の「社会モデル」という外国から入ってきた理論の話をしていたのですが、日本において、「障害関係論」ということばが 1970 年代に使われていました。運動サイドでそのような言及や反転の事例も出されていたのです（註９）。

そのようなことの理論的深化や広がりをなしえなかったところで、歴史の中に埋もれてしまったのです。わたしの理論化、障害関係論の突き出しは、他の差別の問題での反差別論、そして反差別の運動からもインパクトを受けての、哲学的なこととの対話の中での論的深化と拡げることへの試論です。

（註）

１　わたしは「障害の社会モデル」をイギリス障害学の提起を更に展開させて、「障害とは社会が「障害者」と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」と定式化しています。

わたしのオリジナリティは‘障害者’に「　」を付けたこと、差別形態論的な押さえから排除型の差別だけではない抑圧型の差別を押さえた‘抑圧’という概念を入れたことです。

２　パラダイム転換ということとの端的な例は、天動説から地動説のコペルニックス転換ともいいえる大転換を指しています。それは現代的にはもう一つのパラダイム転換、ニュートン力学から量子力学への転換、そのことと同時的に起きている近代知の地平の実体主義的世界観から関係論的な世界観への転換、哲学や科学における転換を指しています。パラダイム転換という語は、大転換だけでなく、そこにおける過渡的転換にも使われる時があります。例えば、「ニュートン力学から量子力学への転換」を大転換とするなら、その間にアインシュタインの相対性理論があり、それに影響を与えたというマッハの哲学があります。

３　わたしは、わたしの理論的作業を「障害者運動」のための理論と標榜しつつ、そのための作業をしています。本をだすときにもそれを標榜しつつ、一体「障害者運動」を担っているひとたちにどこまで伝わるのか、ということを自己批判的にとらえ返していて、この本を出した後に、早急にもう一冊判り易い本を出す予定でいました。判り易い本になってはいないとして出版化はしていませんが、出版した本よりは判り易くなっているとしてホームページにアップしています。wdl.pdf (taica.info)

４　「障害の社会モデル」にはアメリカ障害学の社会モデルもあります。しかし、それはアメリカの公民権運動と消費者運動がリンクした理論なのですが、そもそもパラダイム転換的内容は持っていません。わたしはそれよりも、（註９）で後述しますが、日本の「障害者運動」の中で突き出された、障害の関係論的とらえ方が、イギリス障害学の「社会モデル」に通じる事があると押さえています。

５　わたしは語学的な壁を抱えていて、原語での文献を読めていません。紹介されている本の中の記述からして、モリスの「フェミニズム障害学」を上げることができます。この

「フェミニズム障害学」という突き出しは、わたしは「僭称」と批判しています。モリスの批判の中身は、第１世代は「障害者個人の生きがたさを押さえていない」ということですが、フェミニズムには有名な標語「個人的なことは政治的なこと」があり、しかも、フェミニズムには、「性的差異の脱構築」という概念があるからです。

６　「たわしの読書メモ・・ブログ 133-7／・ジョン スウェイン/サリー・フレンチ/コリン・バーンズ/キャロル・トーマス編著『イギリス障害学の理論と経験―障害者の自立に向けた社会モデルの実践―』明石書店　2010」。『図書新聞』への投稿「・『イギリス障害学の理論と経験』書評投稿　3011 号　2011.4.23「障害問題のパラダイム転換をなしたイギリス障害学-障害概念の分析、国際的視点、性差別、教育の問題点など俯瞰図的に描く」。

この本の反批判の中では、構築主義（「ポスト構造主義」）的観点からの反批判が出ていました。そもそも第１世代はマルクスの影響を受けているという指摘があるのですが、わたしがやろうとしているのはマルクス――廣松理論の流れの物象化という概念を押さえたところでのその中身としての実体主義批判としての展開です。

７　ＩＣＦの障害規定や、「障害者権利条約」の障害規定はしないとしつつも実質的に障害概念を規定していることの不備は、まず英語の‘障害者’という語に、イギリス障害学で出していた、disabled person でなくて persons with disability を用いたことがあります。ですから、with の訳として「障害のあるひと」とか「障害をもつひと」というまさに医学モデル的訳語が横行していくことになります。もうひとつは、「社会モデル」的観点も取り入れようとして、環境概念を持ちだしたところで、個人と環境（社会）の二分法を取り入れたことです。これでは、個人と環境（社会）の関係がつかめなくなり、しかも社会の実体化という「社会モデル」の一番の弊害も抱え込むことになります。

８　‘　’のわたしの使い方は詞を表す語としての用例です。

９　日本で「障害者運動」を担った楠さんが、すでに障害関係論的な押さえをしていました。また、「はるかなる甲子園」というろう学校の野球部を描いた漫画家の山本おさむさんが、その漫画を描くために手話を学び、手話の世界（ろう者の世界）では手話をしらないものが「障害者」になっているという意味で、「手話が出来ないという障害を克服しました」というインタビュー記事を朝日新聞の「ひと」蘭に載せていました。そもそも、「障害」の異化ということをとらえ返せる、ろう者が多く住んでいるところでみんなが手話を使い誰が「聞こえないひと」かそもそも意識しない状態になっているということを描いた・ノーラ・エレン・グロース／佐野正信訳『みんなが手話で話した島』築地書館 1991（読書ノートは「吃屹」10　6a934e_c11d6fded63b480ab4ee4ad94d0e80d2.pdf (filesusr.com)）という本もでています。　（み）

（『反障害原論』への補説的断章(38)としても）

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 175 号」アップ(25／７／3)

◆「反差別資料室Ｃ」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年４月初めに１年ぶりにリアップしました。

◆メインホームページ「反障害－反差別研究会のＨＰ」のⅣ．Ｆ[廣松ノート]
http://www.taica.info/hiromatunote.html に『物象化論の構図』をアップしています。

読書メモ

連載中の［廣松ノート（７)］の『存在と意味』の 18 回目・19 回目。最終回です。

たわしの読書メモ・・ブログ 704［廣松ノート］（７）

・廣松渉『存在と意味１―事的世界観の定礎』岩波書店 1982（18）

第三篇　事象的世界の存立機制

第三章　事象の間主観的存立と客観的存在性

第三節　能知と所知の不二性

(この節の問題設定―長い標題)「能知と所知とは現相的直接態においては「能知的所知＝所知的能知」の未分化的統一態をなしており、直接態における現相はわれわれの謂う“膨縮する身体的自我”の“表面”に定位された自己意識にも譬えられうる。とはいえ、能知と所知とが反省的に分化するのも現相的一事実であって、この反省的区別がとかく存在的区別として錯認される。そして、かかる錯認にもとづいて、物象的外界と心象的内界との存在的截断、ひいては、「身体」と「精神」との二元化的截断の思念が形成され、いわゆる「身―心」問題を生ずる。この件に関して、われわれとしては、生理物理的な「実在的身体」という構造的・機能的一体系の存在論上の“身分”を見定めつつ、身心の一如性をあらためて対自化する。」530-1P

第一段落――物体としての「身体」に、「心」なるものが“内在”しているものとして思念される錯認　531-4P

(この項の問題設定)「われわれは第一篇第二章第一節において、現相的直接態における「能知的所知＝所知的能知」の未分化的統一性を論述しておいた。また、第二編第一章第一節において、いわゆる心象的内界と物象的外界との二世界化が錯認にもとづくものであることを論定しておいた。翻って、しかし、第一篇第二章第二節でみたように、能知が所知から区別して覚識されるようになることも亦現相的一事実であり、そのさい、所知と能知との臨界面は“身体的自我”の膨縮に応じて“移動”するとはいえ、現相的風景世界内における通常的な「能知的主体」と「所知的対象」の区分は“この身”“あの身”という準皮膚的な個体を能知的主体として分凝せしめる。ところが、或る次元での反省態においては、“あの身”はもとより“この身”ですら所知的一対象の相で覚知され、能知としての能知は「精神的能知」に“退縮”する。そこにあっては、「身体」は、前々節で問題にした実相的時空間内に在る実在的事物の一種となっている。そして、この物体としての「身体」に、第二篇第一章で批判的に論究したごとき「心」なるものが“内在”しているものとして思念される。」531P

(対話①)「爰に、身体と心との関係をめぐって、いわゆる「身―心」問題が提起される所以となる。が、われわれとしては、この問題を三つの位相に分けて考えることができよう。

／第一に、典型的には認知や情感の場面で問題になることであるが、身体的状態(とりわけ、脳の機構や機能における状態)と意識的状態とのあいだの関係を論考する位相。／第二に、典型的には意志行為の場面で問題になることであるが、精神的作用(とりわけ、目的志向的な決意性における意志の発動)と肉体的運動とのあいだの関係を論考する位相。／第三に、間主観的な場面で問題になることであるが、他人の心と自分の心とを両極に置いて、その両極のあいだに自他の肉体を挿入し、「心—身—心」の関係を論考する位相。」531-2P

(対話②)「これら三つの位相のうち、第二のものは優れて「実践的世界」で問題になることであるから次巻に譲ることにし、また、第三のものは現相記述的に扱えるかぎりでは既に第一篇第二・第三章および第二編第一章の論脈で討究しておいたので議論の重複は避け、ここでは主として第一の位相に関説することにしたいと念う。」532P

(対話③)「偖、学史を顧みるまでもなく、「精神」と「身体」とを二元的に分離する構図から出発するかぎり、両者の存在関係を説く構案は比較的少数のタイプに帰着する。／第一には、心と身とを二つの実体とみなしたうえで、(イ)利用者のあいだの作用的影響関係を認めるもの、(ロ)直接的な作用関係を認めずに単なる並行的推移を主張するもの、である。前者(イ)「直接的作用説」は、さらなる下位分類として、相互的影響を認めるものと一方的な作用しか認めないもの、つまり、(a)「相互作用説」と(b)「随伴現象説」とに分かれる。後者(ロ)「並行的推移説」は、(a)「機会原因説」と(b)「予定調和説」とに分かれる。／第二には、心と身とを同位的な実体とは認めず、(イ)精神のみが実体で身体はそれの一定在形態にすぎないとみなすもの、(ロ)身体のみが実体で精神はそれの状態ないし機能にすぎないものとみなすもの、である。前者(イ)が「唯心論的同一説」、後者(ロ)が「唯物論的同一説」のさまざまな流派を形成する。／第三には、心と身のいずれをも実体とは認めず、(イ)心と身とは或る根源的な同一実体の二つの属性であるとみなすもの、(ロ)心と身とは或る根源的同一者の二つの現象形態にすぎないものとみなすもの、である。前者(イ)を「一実体両属性説」、(ロ)を「同一本態双貌説」と呼ぶことができよう。」532-3P

(対話④)「哲学史上・科学史上に現われた心身関係論を右に挙げた類型と逐一アイデンティファイするには及ぶまい。具体的に内実においては、往々にして、同一説と随伴説、同一説と双貌説との理説が不完全になるとはいえ、ともかく、如上によって、可能的な基本類型が尽きることが認められるはずである。——ところで、これらの各類型は、いずれもそれなりの仕方で強弁されうるにせよ、どこかに無理を孕んでいる。少なくとも不充分な契機を残している。」533P

(対話⑤)「第一綱に挙げた諸類型は、(イ)直接的作用説の場合、精神という非物質的な実体が物質たる身体に対して能動的ないし受動的な作用関係をどのようにして持ちうるのか、まさに作用のメカニズムを説きがたい。(ロ)並行的推移説の場合、神の干与を持出す形而上学的な議論であるか、さもなければ、説明さるべき当の“並行的推移”を公理的前提のかたちで先取するものであって、問題そのものを回避する遁辞と評されざるを得まい。」533P

(対話⑥)「第二綱に挙げた(イ)唯心論的同一説は「精神」が人間の有限的精神であるかぎり、精神がいかにして自己を物質化して肉体となるのか、所詮は臆言以上のものではない。(ロ)唯物論的同一説は、生理学的心理学の発達によるというよりも、科学主義的・機械論的な世界像に支えられて存外と有力であり、検討に値することを認めるに吝かではないが、精

神現象を物質現象に還元・同定するという命題は、科学的に実証された事柄ではなく、論者たちの要請的期待たるにすぎない。」533P

(対話⑦)「第三綱に配した(イ)一実体両属性説は“両極性”の並行的変化のメカニズムを解明しえないかぎり、第一綱に挙げた作用説や調和説と同断と言われざるを得まい。(ロ)同一本態双貌説は、物心分離のパラダイムを卻けるかぎりで新境地を拓くものとは一応は認めうる。が、但し、謂うところの“双貌”たる身・心両現象のあいだに作用的連関が存在するかのように意識される事情を積極的に説明しえないあいだは、問題の解決というよりも、むしろ問題の回避に類すると言わざるを得ない。」533-4P

(対話⑧)「このようにみてくるとき、物心二元論の構図から発出した身心関係論は、前提的構図の内実を変容しつつ、唯物論的に一元化した同一説、および、現相論的に一元化した双貌説、これら二類型以外はおよそ臆弱である。――尤も、右における簡略な指摘を俟つまでもなく、心的実体であれ物的実体であれ、実体主義的存在観を排却してきた本巻の行文を通じて、「同一本態双貌説」以外は悉く排却さるべきことが慧眼*(けいがん)*な読者には既に彰らかであろうかと畏れる。とはいえ、同一説といえども心身両現象の双貌性を一応認めるかぎり、論理構制のうえでは、此説も一種の“同一本態双貌説”に帰趨する趣があり、顚から卻けてかかるのは不用意に過ぎよう。――われわれとしては、それゆえ、以下では同一説と双貌説とを意識しつつ因果説・随伴説・並行説をも省みることを通じて「身―心」問題のうち「認識的世界」論に関わる位相を討究し、われわれなりの見地を表明することにしたい。」534P

第二段落――“実在的身体”なるものの存在論上の“身分”を見定めることから始める
534-42P

(この項の問題設定)「われわれにとって「身―心」問題の鍵鑰*(けんやく)*は「身体」ならびに「精心」なるものの存在論上の“身分”を見極めることに懸っている。それゆえ、茲ではまず“実在的身体”なるものの存在論上の“身分”を見定めることから始めよう。」534P

(対話①)「実在的身体なるものは、それが一つの物体的事物と見做されるかぎりでは、前々節で論究した実在的事物の一斑たるにすぎない。それは、三次元的な延長体であり、質量をもつ惰性体であり、物質的な構造的組成体である。身体は、物理化学的な物体としては、生体であれ屍体であれ同断の物質的構造体であって、その構造や組成は物体的事物一般の範に漏れず“剖見的観察”や“反応的実験”を通じて“確定”される。が、この“確定”たるや、認識論的にみれば、前々節で確説しておいたように、一群の射映的現相(これには表面的な観察現相もあれば物理化学的な反応現相もある)を斉合的・統一的に“説明”しうるごとき“所識的な或るもの”の“構成”にほかならない。(尤も、ここに“構成”される“所識的或るもの”は単なるイデアールな存立態ではなく、所与の視覚的・触覚的・等々の射映的現相に即しつつ時間・空間的に定位された“受肉”体である。)こうして、とりあえず、生体と死体とを特に区別することなき物体としての身体は、物理化学的な“反応”という対他的関係規定性を内自化しつつ“構成”された一成体であり、物理化学的存在以上のものでも以下のものでもない。(尚、実在的身体の構造や機能の“確定”にさいして、各人の身体が基本的には同型的・斉一的であるとの前提的了解のもとに、前々節で論じた「サンプルに即しての構成」がおこなわれることは附言するまでもあるまい。)――ところ

で、人々は物体に関して「構造的機構」と「機能的態勢」とを区別する。そして、構造的同一性と機能的同一性とは必ずしも照応しないと人々は考える。(例えば、金槌と石とは構造は相違するが釘を打つ機能は同一であり、湯と水とは構造的には同一であるが冷却する機能は相違する、等々。われわれの見地から考えれば、構造的機構と機能的態勢とは、十全な精度で確定すれば、一義的に照応するというよりも、同一事に帰着するとも考えられる。しかし、一般の手法における構造的確定と機能的確定とは“精度”を異にし、そもそも対他的反照規定の内自化的措定の仕方を異にするため、構造的“同一性”と機能的“同一性”とのあいだに乖離を生ずる次第なのである。)われわれとしても、暫く、この通念に仮託して議論を進めよう。」534-5P

(対話②)「身体は機能体としてみても、物理化学的な次元での機能的関係に即するかぎりでは、一般の物体的事物から殊更区別さるべき所以とはならない。ところが、身体は「心」(意識的現象)との機能的関係に即してみるとき、屍体と生体とでは決定的に相違すると思われ、少なくとも非アニマティズム的な物体観のもとでは、人間の身体は一般の物体的事物と決定的に区別される。この区別はサイエンティフィックな研究によって精密化されるに違いないが、もとはといえば、現相的な日常的体験の場に根差すものである。現相的知覚風景における一つの分節肢たる“この身体”にあっては、それの移動や回転にともなって風景的世界の情景が激変するとか、それの一部たる眼や耳や鼻を覆うと知覚的風景の或る種の現相が消失するとか、それの表面や内部に特有な感覚が感受されるとか……、他の事物に関しては一般にみられない特異性が見出される。このことの覚知は、原初的には知覚風景内の構図に定位されており、身体という知覚的風景世界の分肢的一部分とそれ以外の諸分肢(ひいては知覚的風景全体)との機能的関連の覚識であり、知覚風景の内部における謂わば“同一平面内”での(つまり、現相的分節肢という“同じ資格”の所知どおしの)「或る分肢—他の諸分肢」関係の認知である。やがては、しかし、物体的分節化にともない、「身体」は、知覚的風景内の分節肢に時空的に定位されつつも、射映的現相体以上の“実在的物体”として、直接的な知覚風景には現出しない「内的構造」や「内的機能」をそなえた相で対象化される。そして、楯の反面として、前々篇第二章や前篇第一章でみたごとき経緯のもとに、現相的風景世界が“内化”され“心象的内界”の想念が形成される。ところで、物体的分節相での覚知が成立している場面でも、「身体」は依然として知覚的風景世界に定位されており、身体と爾余の現相との機能的関係が覚識されるが、それが今や“実在的物体”としての「身体」と“心象的内界”との機能的関係と二重写しに思念される。あまつさえ、この機能的関係は、日常的体験の場では、一定の身体的状態に因って一定の心象的状態が生じ、また、一定の心象的状態に因って一定の身体的状態が生じるという“因果的”な相互的規定関係の相で覚識され易い。」535-6P

(対話③)「学理的反省以前の日常的な体験の場で形成される「身体的状態と心象的状態との相互的規定関係」という構図を維持したまま、否むしろ、この構図を前提的な枠組として、「機能系としての身体」なるものが学理的に“確定”される。今日の科学は、「身体」という「末梢—中枢」系の生理学的な「構造と機能」を精緻*(せいち)*に“確定”しつつ、そのような「身体」と「意識的状態」との関係を研究している。だがしかし、身体と意識(“心”)とのあいだに関係があるということ自体は、科学的研究によって発見されたことではなく、

具体的な科学的研究に専攻する既定的了解事項であること、われわれはこのことを銘記してかかる必要がある。なるほど、今日の生理学的研究は身体に関する精密な研究にもとづいて身心関係の具体相を闡明*(せんめい)*する。とはいえ、そこにおける構制は現相的世界において現認される「身体現象と爾余の現相との相即的変化関係」という構図の埒を超脱するものではない。慥かに、脳生理学は脳の構造や機能を詳密に“確定”する域にまで進んでいる。が、脳の構造や機能の“確定”とはいかなる事柄であるか？　そこには、生体であるか屍体であるかに関わりなき構造の確定や、意識現象の有無に関わりなき物理化学的な反応機能の確定のごときもさしあたりは含まれている。そして、それが基礎的な確定作業をなしていると言うこともできる。が、この次元での確定は、それがどこまで精緻化されようと、それ自体ではいわゆる意識現象には“出会”わない。脳生理学的研究においては、既知の意識現象に“対応”する相での脳生理学的機能状態が“確定”(実は“構成”)される。研究者たちが意識現象(“心的現象”)との関係で脳の機能的状態を探求しているとき、その機能的状態は、単なる物理化学的な機能的状態ではなく、まさしく「意識現象に“対応”しているごとき機能的状態」なのである。問題は、この「意識状態」に“対応”している機能的状態」の“身分”である。(ここに謂う“対応”は、単なる“並行的”現象と了解されるか、“因果的”と了解されるか、“随伴的”と了解されるか、論者によって岐れうる。)」536-7P

(対話④)「研究者たちは、今日では、脳の特定部位に微細な電極を押し込んで、その部位の“電磁的状態”を電流計の指針の動き(という直接的に観察できる表面的な知覚現象)を手掛りにして察知できるようにしておいて、例えば、被験者の耳許で音を発したさいに生ずる脳の機能的状態を“確定”し、その脳髄における内部的状態に一定の“意識状態”を“対応”づける。(この“対応づけ”の論理的機制については別の折に論じておいたが、謂うところの“対応”そのことをブラックス・ボックスのままにしている当座の論脈ではこれに立入るには及ぶまい。)」537-8P

(対話⑤)「ここでの構制に注目しよう。それは、果たして、日常的な体験の場における「身体的状態—意識的状態」の“対応”づけと別趣の構制であろうか。人は、例えば、轟音にともなって他人の顔面に一定の表情が現われたのを看取し、その“表情”(という身体的現象)に一定の“意識的状態”を“対応”づける。ここでは、意識的状態が“表情”という直接的に看取される現相と“対応”づけられるのであって、(それは謂わば“電流計の指針の動き”との“対応”づけであり)、内奥の身体的状態(脳の機能的状態)と対応づけられるわけではない。このかぎりでは脳生理学的意識現象の探求とは異なるようにみえる。だが、脳の場合、電流計の指針の動きという「徴候」的な“浮標”を手掛りにして脳内部の“電磁的状態”が探知されるとはいえ、この“電磁的状態”が直ちに“脳の機能的状態”の“本体”というわけではない。“本体”にとっては、“電磁的状態”も所詮は“徴候”な一“浮標”たるにすぎず、そのかぎりでは、“電磁的状態”といえども“指針の状態”と同趣であり、従って、“表情”とも同趣であると言うことができる。反面では、また人々は日常、なるほど“表情”と“内部的意識状態”とを“対応”づけ、一定の意識状態が一定の表情を生ぜしめるという言い方をするが、しかし、意識がストレートに表情を産出すると考えているわけではなく、表情の産出には内部的な身体的過程があるものと了解している。身体

的現象と意識的現象のあいだにアクチュアルな規定関係があると思念されるとき、いずれにせよ“内奥の身体的過程”が想定されているのであり、身体的状態と意識的状態との直接的な“対応”の座は“内奥”に置かれている。このとこに鑑みるとき、日常的体験の場における「身—心」の関係づけも科学的研究におけ。「身—心」の関係づけも基本的な構制においては同一である。」538P

(対話⑥)「茲で焦点になるのが、謂うところの“内奥の身体的状態”(それも単なる構造ではなく、機能的状態系)、それの“確定”の在り方である。この内奥の身体的状態という「実在」は一連の“徴候”的“浮標”現象を手掛りにして“確定”されるが、それが単なる物理化学的存在ではなく、あくまで意識的状態と一義的に“対応”する機能的状態として“確定”されるかぎり、そこでは“浮標”的な身体現象を“斉合的・統一的に説明”するだけでなく、“意識的諸現象との対応性”を併せて斉合的・統一的に説明できる相での“構成”がおこなわれる。なるほど、内奥の身体的状態なるものは単なる物理化学的な実在相で“構成”されることもでき、これと意識的状態とが思弁的に対応づけられることもありうる。がしかし、いやしくも“身心関係の実証的研究”と称される場での“内奥の身体的状態”の“確定”作業は甫めから先取（註）的に“意識的諸現象との対応性”を併せて“斉合的・統一的に説明”する相での“構成”になっているのが実情である。ここでは、意識的状態と身体的状態との“対応性”そのことは実証されるのではなく、先取的に“投入”されているのである。(この先取を前提した上で、“対応”する身体的状態の具体相が“確定”される。)いわゆる実証科学的な「身—心」対応性の研究なるものにあっては、「心—身」が対応性(これの内容は上述の通り“因果的”“随伴的”“並行的”に岐かれうる)をもつような相で“内奥の身体的状態”なる“実在”が“構成”されている。けだし、われわれとしては、“実証科学的な身心関係論”をそのまま追認する流儀で「身—心」の関係性を論決しえない所以であって、“実在的身体”なるものは、日常的な描像であれ“実証科学”的な描像であれ、存在論上の“身分”に関していえば、所詮、説明さるべき現相を斉合的・統一的に“説明”すべく“構成”されたものにほかならない。」538-9P

（註）*この字は「あなかんむり」が付いているのですが、その漢字がどうしても探し出せません。「先取」となっているところもあるので、「取」としておきます。以下同様に。*

(対話⑦)「翻って、“物象的外界”に属する“実在的身体”とのあいだに「身—心」関係をもつとされる。“心象的内界”“意識的状態”とは何か？　それはしばしば非物質的＝精神的な実体たる霊魂なるものの“内部にある世界”ないし霊魂の“内的状態”として思念される。がしかし、本巻ではまだ“実体としての霊魂”なるものを主題的に検討する作業を続巻に委ねたままになっているとはいえ、前篇第一章の論脈で暫定的に論断しておいた通り、謂うところの“心象的内界”“意識的状態”とは、その実態においては、現相的風景世界(ここではいわゆる感情や気分なども現前する)を改釈的に“内在化”したものにほかならず、事柄としては現相的風景世界と別ものではない。“心象的内界”“意識的状態”とは、与件的な事柄としてみれば、個別的な能知的主体誰某に帰属せしめられているかぎりでの現相的風景世界そのものである。」539-40P

(対話⑧)「爰において、“物象的実在身体”と“心象的意識状態”との「身—心」関係(すなわち、先に区分した「身—心」関係の「第一の位相」)は、一方における現相的風景世界の

全体ないしこれの個別的分肢、と、他方における現相的身体(これは現相的風景の一分節肢)がそれ以上の或るものとして識られた実在的身体(これ自身は現相的風景世界に如実には登場しない)との関係である。――この「身―心」関係は現相的風景界内部での“身体”という分節肢と爾他の分節肢とのあいだの、謂わば“同一平面内”での現相的関係とは現に区別されねばならない。けだし、謂うところの「物象的実在身体」は現相的風景世界面を超越しており、それ自身としては非現相的な「身体」だからである。――現相的風景界内部における“身体”現象と爾他の分節肢との関連であれば、われわれは現相的な覚知に即して分析的に記述できる。(表情や身振であれ、脳内の電極に接続された電流計の指針の動きであれ、現相的に観察・覚知される“身体現象”と爾他の現相とは単なる並行的推移相を呈するとはかぎらない。一方に他方が合規則的に継起する相で覚知される場合もある。)が、この次元での“身体現象”と爾他の現相との関係は、それ自身では、哲学者たちが問題にしてきた「身―心」関係ではない。伝統的な哲学的問題をなしてきた「身―心」関係は、われわれの見地から定式化すれば、あくまで超越的身体と現相的風景世界との関係である。――しかるに、超越的な実在的身体なるものは、先にみておいた通り、単なる物理化学的な存在としても構造や組成が“確定”されうるにせよ、そしてこれが実在的身体の不可欠的契機をなすにせよ、いやしくも「身―心」関係のアクチュアルな項として探求されるかぎり、現相的“身体現象”と爾他の「現相」(心象的内界・意識的状態として思念される現相)とのアクチュアルな関連性を“斉合的・統一的に説明”できる相に“構成”されている。なるほど、論者たちは、身体を虚心坦懐に研究し、それにもとづいて「心」との関係を認定したつもりでいる。論者たちは、慥かに、身体を物理化学的に研究している場面では虚心かもしれない。だが、当の研究は、「心」との関係を遮断しているが故に物理化学的なのであり、まさしくその故に、それ自身では「心」との関係を確定できない。そこで、論者たちは「心」との関連性を研究する場面では、物理化学的・生理学的な研究を基礎としつつも、身体を単なる物理化学的存在以上の機能的状態系として“確定”しようとする。しかるに、身心のアクチュアルな関連性の現場たるこの機能的状態系の“確定”という作業が、上述の通り、実際の構制においては、“身体現象”と爾他の「現相」との関連性を“斉合的・統一的に説明”できる相での“構成”になってしまっているのである。このゆえに、“実在的身体”と“意識状態”との「身―心」関連性、それが“因果的”であるか、“随伴的”であるか、単に“並行的”であるか、却って“同一的”であるか、これは実証的研究によって発見されるのではなく、“実在的身体”の機能的状態なるものの“構成”にさいして先取的に“投入”される関係づけである。そしてここにあっては、“因果的”“随伴的”“並行的”“同一的”……という関係性のどの形式を投入するかは、実証性という観点からは、さしあたり同権であり、いずれにせよ実証性を超える“態度決定”である。」540-1P

(小さなポイントの但し書き)「(われわれはもとより“因果説”“随伴説”“並行説”“同一説”が全く同位的な理説であると言うつもりはない。それは“斉合的・統一的に説明”にさいしての“優劣”、遡っては、体系全体との調和性に懸る。が、ここでは“優劣”の問題に立入るには及ばないであろう。)」541P

(対話⑨)「――われわれとしては、こうして、“実在的身体”と“意識状態”とのあいだの「身―心」関係という問題については、伝統的な問題設定の線では、謂うなれば一種の“形

而上学的態度決定”に帰趨すること、問題構制に即していえば、“実在的身体”なるものの“構成”の仕方に応ずる循環的先取に帰着すること、のことをとりあえず確認する。そして、認識論的世界論を主題とする本巻ではこの件に関する“形而上学的態度決定”を差控えるというよりも、現相的世界を超越する“実在的身体”なるものを自存的な一存在とみなす「身—心」関係論の構図的前提そのものを排却することにおいて、伝統的な身心関係論の問題設定それ自身を止揚する。」541-2P

第三段落——“客観的実在性”を措定する“実在的事物としての身体” 542-7P

(この項の問題設定)「われわれとしては、それでは現相的風景世界の内部における“身体現象”と爾余の諸現相とのあいだの相互的連関性を単に記述することで自足し、「身—心」問題を現相的“身体”と爾余の現相との謂わば“同一平面内”での関係の次元に還元しようと図るのであるか？　或る意味では「然り」であるとはいえ、さしあたっては、むしろ「否」である。——現相的世界は射映的現相以上の或るものとして現前し、単なる射映的与件以上の“実相的”対象界を現識せしめる。そして、その一斑として“実相的”身体も覚知される。われわれは“実相的”事物なるものが射映的現相与件から超絶的に自存するかのように錯認する思念を厳しく卻けるとはいえ、上来種々の論脈で誌してきたように、射映的“仮現相”とは区別される“実相的”事物(実相的時空間内に定位された“客観的実在”としての事物)の“客観的実在性”を措定する。“実在的事物としての身体”もその一斑として現存する。(実在的事物は射映的所与がそれ以上の或るものとして所識される二肢的二重性の構制に根差しつつ、射映的現相を斉合的・統一的に“説明”すべく“構成”された所識的な在るものであるにせよ、そして、この所識体は射映的現相に“受肉”しているにせよ、射映的現相には還元できない。)」542P

(対話①)「われわれにあっても、茲に、“実在的事物としての身体”と“現相的風景世界”(知覚的風景世界や表象的風景世界)の諸肢節ひいては全体とのあいだの関係が問題になる。」542P

(対話②)「偖、われわれの謂う「現相的世界」の現存性は、通念によれば、「末梢—中枢」系としての生理・物理的な身体の内部的過程に負うものとされている。われわれとしても、現相と区別して“客観的実在”としての“身体”なるものを措定するかぎり、現相世界が“身体の内部過程”によって媒介されて現存することを立論する。(われわれはこれまでの行文において、現相的世界の被媒介的な存立機制を論攷しつつも、“身体内部過程”による被媒介性に論及しなかったが、それは“実在的身体”なる概念の導入を待たねばならなかった所為である。)」542-3P

(対話③)「われわれの“身—心”関係論にあっても、やはり、唯単なる「構造的機構」としての身体ではなく、「機能的態勢」としての身体が問題になる。ところで、嚮の議論にさいしては「身体の機能的状態」なるものが恰かも皮膚的限界の内部で閉じているかのように論じ去ったのであったが、厳密に考えれば、「機能的状態系としての身体」は皮膚的限界で劃されてはいない。なるほど、或る種の論者たちは、身心関係を論ずるにあたっては脳中枢の機能的状態は脳内部で閉じているわけではなく、末梢をも含む全身的状態によって規定されているどころか、皮膚的身体外部からの刺激によっても規定されているのであり、厳密にいえば、物理的実在世界の全体を包摂する一つの機能的状態系が存在するのである。

そして、このグローバルな機能的状態系が“脳”その他の“部位”を“接点にして”(？)“意識的世界”と“関係”しているという構図になる。こうして、今や、「身—心」関係は、それ自身としては非現相的な“実在”である「グローバルな機能的状態系」と「現相世界」との関係として問い返さねばならない。(われわれはここに謂う「グローバルな機能的状態系」を第一篇第二章に謂う「世界大に膨脹せる身体的自我」に対応づけることができよう。)——ところで、「機能」とは何であるか？　それは、発現して一定の現実態になる或る可能態にほかならないのではないか。発現して現実態になる或る可能態を事物に“内自化”して人々は「機能」と呼んでいる。機能には諸々の種類があり、物理・化学・生理的な機能のごとき単なる物的な機能もある。が、今問題の「機能的状態」は、物理化学的な反応を呈しうるにしても、単なる、物理・化学・生理的な機能ではない。それは、まさに現識される現相的世界という“意識的状態”＝現実態へと“転成”しうるごとき「機能」的状態＝可能態である。——このような相で“構成”されることにおいて、謂うところの「機能的状態系としての身体」、剴切には“グローバルな機能的状態系”と“現相的意識状態”とは「可能態—現実態」の関係にある。(可能態とそれの転化する現実態とのあいだの関係は、前章第三節でみたように、非一義的であり、非決定論的あることに留意されたい。)われわれは“身体の機能的状態”と“意識状態”との“身—心”関係を、認識的世界論の論脈では、さしあたり、“可能態”と“その現実態”との関係として(“対応”づけて)把え返す。」543-4P

(対話④)「ところで、「グローバルな機能的状態系」は決して無構造の団塊といったものではなく、謂うなれば“布置的構造”をもった“分節態”をなしており、そのような相で現実態化するものとみるべきであろう。(われわれはこのような相で“身体的機能状態”を“構成”“再構成”する。)それは、それ自身としては非人称的＝人称未然的であり、諸多の“身体”(但し機能的状態性)を包摂する機能的連関態であるが、それの各部位は、必ずしも均質的・均等的ではなく、特異性をもっている。各部位の在り方は全体の“函数”でありつつしかも部位毎の特性を具有している。」544P

(対話⑤)「このような即自的な「機能的状態」が対自的な「意識的状態」へと“転成”するのであるかぎり、「可能態」から「現実態」へのこの“転化”は、機能的状態系がグローバルであることに鑑みて、「世界が世界す」(Welt weltet)と称することもできようが、われわれとしてはそれを即自的状態の「対自化」(Für-sich-werden＝対自的現成)と呼ぶことにしたい。——このさい、対自態へと“転化”する即自態をあくまで機能的な可能態として把握することが肝要である。「機能的状態」は、なるほど、それを対象化して規定すれば持続する「もの」の相で考えられる。だが、状態は不断に再生されつつ継続するのであり、謂うなれば“瞬時的”な状態がその都度現実態に“転化”するのであって、機能的状態なる持続体が“貫入”してくるのではない。“転化”という詞を用いるかぎり、継時的な出来事のように受けとられるのは詮のないことであるが、可能態から現実態への“転化”、即自態から対自態への“転化”は、実在的事象の継時的変化とはカテゴリカルに異なり、非時間的である。この“転化”の構制は数学における「截断」の構制になぞらえることもできよう。——翻って亦、今問題の「機能的状態の対自化」は、人々が「脳はセルフ・レファレントに脳自身を認識する」という言い方をするのに倣って言えば、やはりセルフ・レファ

レントである。「グローバルな機能的状態系」の諸々の部位において「対自化」が現成しているとしても、その各々がセルフ・レファレントであり、そこにあっては「能知」と「所知」とは存在的*(「オンティッシ」のルビ)*には不二である。」544-5P

(対話⑥)「われわれは、茲で、右の立言が、旧来の「身—心」関係論における「同一本態双貌説」や「同一説」とどのような関係に立つかを省みておこう。——われわれの場合、“転化”を云々する以上、“転化”の前後では別であるが、しかし、全く別々のものの並存ではなく、前後を通じての「同一者」の存在が論理上要求される。この論理的要求からすれば“転化”の前後は「同一者」の「双貌」ということになり、われわれの立論は「同一本態双貌説」の一種ということになろう。しかしながら、われわれの議論では“転化”という概念的把握の論理構制が或る同一性を要求するだけのことであって、われわれは当の「同一者」が実在するとは主張しない。それゆえ、われわれの立論は、積極的な「同一本態双貌説」には算入されないはずである。(われわれは、例えばマッハなどのように「身」と「心」とが同一の「成素」から成る二つの貌であるなどとは主張しないし、そもそも物象過程と心象過程とが同一本態の両つの定在形態であるなどとは主張しない。) ——ところで、身体的状態と意識的状態との関係を「因果」とか「随伴」とかの関係として把えるのではなく、また、単なる「並行」の関係と把えるのでもなく、“転化”として把え、そのかぎりで前後を通ずる一種の“同一性”を措定しながら、第三の“実在的同一者”を認めないわれわれの立言は、一種の「身心同一説」になってはいないか？　われわれの立論は、旧来の「同一説」とは議論の立て方においても存在観においてもおよそ相違する。われわれは「精神的実体」も「物質的実体」も実体主義的には措定しない。とはいえ、俗流唯物論的な同一説論者たちは、われわれの嚮の立論を彼等流の「唯物論的な身心同一説」の一亜種とみなすことであろう。われわれ自身、嚮の立論のかぎりでは、(いかに存在論を異にし、また、いかに非決定論であろうとも)俗流唯物論的な身心同一説の一亜流に近いものとみなされることに甘んじるのほかはないかとも思う。」545-6P

(対話⑦)「以上の立言は、しかし、知覚的風景に現前する現相的身体ないし「身体的自我」と区別して“客観的実在”としての“身体”なる“深奥の機能的状態系”をわれわれが措定するかぎりでの(そしてこの“実在的身体”による現相的世界の被媒介性を立論するかぎりでの)ことである。“客観的実在”としての“事物的身体”なるものは、もとより、得手勝手な 恣意的構想物ではない。況んや幻想ではない。それは“客観的事物”の一斑として物理化学的な対象的実在である。(それはさしあたっては生理学的対象として規定されるとしても、突き詰めて行けば素粒子から“成る”構造的機構体の機能的状態系ということになろう)。だが、この“客観的実在としての身体”は、存在論上の“身分”に関していえば、「知覚的に現前する現相的身体」の射映的諸現相(これには、解剖して観察される所見や、挿入した電極に接続された電流計の指針の運動的所見、などのごときも含まれる)を“斉合的・統一的に説明”しうべき相に間主観的に“構成”された所識体にほかならない。われわれにとって第一次的・基底的に存在するのは、「知覚風景的に現前する現相的世界」(これは、その都度すでに単なる射映的現相以上の或るものとして「所与—所識」成態)であって、「実在的事物」自体なるものは、現相的所与がそれ以上の或るものとして所識される高次の所識体を(現相的与件に定位しつつも) “自存化”させたものである。(この“事物の自存

化”と相即的に、遺憾にも、実際には第一次的・基底的な存在である「知覚的現相世界」が“内化”されて“心象的内界”という単なる“心理的なもの”と改釈されてしまう。）――われわれは、知覚的に現前する現相世界を(これは、第一篇でみたように、表象的に補完されているが)“心象的内界”として改釈することなく、あくまでこれを第一次的・基底的な世界として把（註）住し、従って亦、“事物的世界”を超越的に自存化せしめることを抑え、そして、“実在的身体”とその“機能”なるものが射映的現相を“説明”する“可能的一配備”にすぎないことを自覚するかぎり、いわゆる“身―心”関係について、ミニマルには、現相世界に内在的な記述的分析で自足する。」546-7P

（註）*印字がかすれていてきちんと読み取れないので推測です。*

(対話⑧)「現相世界内在的には、“身体的現象”（これには上述の通り、解剖的な所見や実験的所見も含まれる)と爾他の各種現相の相関性、一者の変化と他者の変化との合規則的な連動性、……が覚知され、諸々の現相(「所与―所識」成態)の“この身”“あの身”への帰属性・不帰属性等が覚識されるが、これらの現相の現前は「能知的所知＝所知的能知」の渾然一体的統一相であって、ここではさしあたり「能所不二」である。」547P

(対話⑨)「われわれは、今や再び、かかる「能知能動的主体―所知所動的客体」未分の相、現相的世界の原初的直接態に立ち戻って、新たな視角から世界の編制構造を検覈しなければならない。――本巻では認知的*(「コグニティヴ」のルビ)*に展らける世界現相の基幹的構制に臨んだのであったが、今や、巻を新たにして、実践的に拓らける世界に臨む段である。」547P

たわしの読書メモ・・ブログ 705［廣松ノート］（7）

・廣松渉『存在と意味１―事的世界観の定礎』岩波書店 1982（19）

「解説　坂部恵」(『廣松渉著作集 15　「存在と意味(１巻)」』岩波書店 1997)

解説はひとの数だけ解説があるので、一つの意見として参照するしかないのですが、哲学史的な押さえがわたしにはないので、そういうところを特に押さえて、切り抜きメモを残します。何か、この「解説」に違和を感じるところもいくつかあったのですが、ことば化しえません。とりあえずの切り抜きに止めます。

1

「「共同主観性」、「関係主義」、「事的世界観」等を骨子とする廣松哲学の基本的結構が、『世界の共同主観的存在構造』(一九七二)あたりでひとまずの完成の域に達し、したがってまた、もっとも無駄のないいわば引き締まった表現に達していることは、多くのひとが認めるところだろう。」565P

「一方、本巻と続巻の『散在と意味』第一巻、第二巻(一九八二、一九九三)は、おなじ著作集で最後の締めくくりの位置に置かれている。ということは、当然(第三巻の未完という事情はあるにせよ)、この著作が全体の掉尾を飾るにふさわしい廣松の「主著」ないしライフ・ワークとして位置づけられていることを意味するといってよいだろう。」565P

「『世界の共同主観的存在構造』や『事的世界観への前哨』(一九七五)で、みずからの基本的発想の形はほぼ完成し了えていながら、いやそれだけに、その発想を、予備的・部分的

展開を折に触れては試みつつ、認識、実践、文化の三領域にわたる総合的体系にまで、展開・分節・検証とようという意欲には、熾烈なものがあったように見受けられる。」565-6P
「これらの先刻承知のあまたの事例にもかかわらず、廣松は、あえて、『存在と意味』の体系の構築に踏み切る。しかも、他のあれこれの論者が同様の挙に出れば、たちまち、いまどき体系などとは、アナクロニズムだ、トンキホーテだといった陰口があちこちから聞こえてくることになるだろうが、廣松の場合には、そうした批評をあまり耳にしない。長年の実績を踏まえ、時代状況を重々意識しつつ選び撮られた構えには、そうしたやわな陰口や批評などをたちどころに圧殺するおのずからなる迫力がそなわっているということなのだろう。」566P
「廣松は、まず間違いなく、二〇世紀の代表的哲学書である『存在と時間』や『存在と無』を意識しつつ、それらに対等にわたり合う気概をこめて、主著の標題を選び取った。しかし、選びとられた標題は「存在と時間」でも「存在と無」でもなくて、「存在と意味」であった。」567P
「ここにそうおもってみれば、いわば廣松の発想の「意味論的転換」とでもいうべき基本的性格が的確に示されている。世にいう「言語論的転換」をもじって、わたしがここで「意味論的転換」というのは、いうまでもなく、廣松自身の表現でいえば、「世界の共同主観的存在構造」ないし「事的世界観」(への転換)にあたる。「意味」とは「共同主観的」形成体にほかならず、「存在」(もの)とは「意味」(何々であることないし何々としてあること)と見つけたり、というわけだからである。(もちろん、このことは、「事的世界観の定礎」という本書の副題と正確に照応する。)」567P
「・・・・・・『存在と意味』の「体系」についてもう一言いっておきたい。『存在と意味』は、本巻の序文冒頭にいわれているように、第一巻「認識論的世界の存在構造」、第二巻「実践的世界の存在構造」、第三巻「文化的世界の存在構造」という三巻構成で企画されている。この三巻構成が、「純粋理性批判」、「実践理性批判」、「判断力批判」というカントの批判哲学三部作、(さらには、それを踏襲した、「純粋認識の論理学」、「純粋意志の倫理学」、「純粋感情の美学」というコーヘンの三部作等)の線に添うものであることは、自明である。では、たとえば、なぜここでヘーゲルではなくて、カントなのだろうか。」567P

2

「『存在と意味』の三部構成の意味するところは見るには、それとカントないしカント主義の体系との単なる表面的類似に目を奪われることなく、廣松の発想ないしその根本結構にまでさかのぼって見通しを立てることが是非とも必要である。発想の根本結構というのは、ほかでもない、すでに触れた、共同主観性、事的世界観、加えて、関係主義(関係の一次性)、等々、本巻所収の第一巻でいずれも立ち入った解明がこころみられる一連のキー・コンセプトである。」568P・・・*「等々」の中身として、物象化論、四肢構造論……*
「この廣松の根本結構の中で、理論—実践の二元的対立は、(カントの場合とはちがって)、絶対的ないし両立不能のものではない。共同主観的構成体である「意味」は、(ついでにいえば主観—客観の二元的対立と同時に)、理論—実践の二元的対立を超えている。それは、共同主観的な習慣を通して形成され、さまざまなレベルの実践のなかで修正され、ときには物象化され、形骸化され、風化し、等々、習慣や実践と不可分な形で共同主観的な世界

のなかに住み着き、息づき、時に病的組織と化しているからである。(ことさら「弁証法」という用語を表面に出すことはないとはいえ、このように整理してみると、廣松が弁証法的発想よくこなれた形で使っていることがあきらかだろう。)」568P
「という次第で、カントが「理論理性」と「実践理性」を分断して、その上であらためて両者の「裂目」の糊塗・架橋に第三の批判書たる『判断力批判』をアド・ホックに美と有機体に関する理説として書くことを余儀なくされたという不器用な事情が廣松を見舞うことも、幸いにして絶えてない、ということになる。『存在と意味』の第三巻「文化的世界の存在構造」は、むしろ第一巻、第二巻の発想とその根本結構のごく素直な延長上に、制度や組織やあるいは生態系をめぐる諸問題をあつかう予定であったようである。「文化」の領域もまた、共同主観的な活動と環境世界とのかかわりにもとづいて形成され、維持され、変革され、硬直し、抑圧し、等々の諸側面を呈する点において、認識や道徳・倫理のいとなみと根本的にはすこしも変わることがない、と見做されているのである。」568-9P
「(理論的)認識の問題も、実践、道徳・倫理にかかわる諸問題も、そして文化形成体にまつわる諸問題も、こうして、すべてが、「共同主観性」、「事的世界観」、「関係主義」、「物象化的錯視」ないし「実体主義的錯視」等々の基本的な概念装置の枠組みによって統一的視点からあつかわれることとなる。認識、道徳・倫理、文化等は、したがって、共同主観的意味形成体のさまざまな領域ないしレベルのちがいと見なされることになり、相互の境界は截然と別たれることはなく、むしろ、中間領域的な事象がいたるところに見られるということになるだろう。」569P
「しかし、廣松には、個人道徳よりも集団的な「人倫」を、あるいは市民社会よりも国家を優位に置くような、ヘーゲル流の階層秩序や集団主義の考えは見られない。・・・・・」569P・・・*そもそもマルクス派の倫理学などありうるのでしょうか？*
「ともあれ、一見古風とも見える『存在と意味』のカント風の三部構成の「体系」が、その実、むしろカントの結構の徹底した換骨奪胎(おのぞみなら「ディスコンストラクション」といってもよいが、廣松は古拙な漢語のほうを好むだろう)と、ヘーゲル風の階層秩序や集団規範主義のこれまた徹底した「水平化・平均化」の上に成立している、まことに「ラディカル」な哲学的思索の産物であることを、読者は是非心にとめておいていただきたい。」569-70P

3

「さて、この第一巻「認識的世界の存在構造」について。／この巻が、カントにおける『純粋理性批判』とおなじく、廣松の『存在と意味』の体系において、全体の基礎を据える位置をしめることは、一読あきらかなところだろう。認識が、実践や文化の基底にある、人間の基本的な営為であることからしてもそのことは容易に納得の行くはずのことである。／しかし、特殊廣松的な思考の文脈に即していえば、認識は、「事的世界観の定礎」にあたって、いわばもっとも当の「事的世界観」に対する抵抗の強い領域、あるいは、いいかえれば、事柄の性質上「もの的世界観」がもっとも住み着きやすく、現にそうした錯視による汚染が日常の知覚から科学的・哲学的な認識理論にいたるまで、ほとんどそれと自覚されることもない常態と化している領域である。」570P
「ということは、この「認識」の領域で一旦、思考の根本的結構を周到に定めておけば、「実

践」や「文化」についての考察は、それら各々の領域に特有の考察原理や方法を適宜補うことによって、ほとんど「認識」の領域で置かれた理論的基礎の応用問題として扱えることを意味するにほかならない。・・・・・・」570P

「元来、物理学をはじめとする自然諸科学に深い関心を寄せ、また早くからマッハの認識論に注目していた廣松にとって、この第一巻「認識的世界の存在構造」のあつかう問題領域は、今し方述べたように、「実践」や「文化」を含めた『存在と意味』の考察領域全体への理論的定礎となる同時に、個人的な思想形成の経緯からしても、もっとも早くから関心の集約点となり、また他の分野全体への思索のバックボーンとして機能しつづけた領域でもあった。／その次第は、本著作集の後続第十六巻『存在と意味』第二巻に合わせておさめられる予定の彼の卒業論文「認識論的主観に関する「論攷」を本巻の『存在と意味』第一巻と多少比べていただければ、どなたにもただちにわかっていただけるはずである。そこには認識の問題をあつかうについて、文献を含めた素材についても、そしてとりわけ基本的な発想の結構についても、学生時代の廣松が二十年後の「主著」を先取りする多くのものをすでにもっていたことが如実に示されているからである。」571P

「廣松が本当は学部専門課程で研究のテーマとしてマッハを取り上げたくて、当時の主任教授に相談したところ不適切と判断され、止むなく右記の「認識論的主観云々」に連なる諸テーマに切り替えたという話は、今日ではよく知られている。・・・・・・」571P

「マルクス主義公認の模写説の認識論に真っ向から反抗し、またレーニンがわざわざ標的に選んで批判・攻撃する戦略に出ているあのマッハのラディカル・コンヴェンショナリズムをことさらに取り上げて称揚する、というマルクス主義のなかでの反逆的な姿勢に廣松を誘ったものが何であったのか、・・・・・・」571P

「・・・・・・廣松が、マッハをくぐり、新カント派の判断論・認識論をくぐり、という(マルクス主義の内と外とを問わず)当時の哲学研究の常道とはかなり変わった道をひとり黙々と歩むことがなかったならば、今日の『存在と意味』、とりわけその第一巻は到底現に見る形では成り立ちえなかっただろうということである。」572P・・・*坂部さんは、新カント派の幾人かの名を挙げているのですが、廣松さんが「函数的連関態」として援用する新カント派のロッチェやカッシーラーになぜか触れていないのです。*

4

「『存在と意味』第一巻は、見られるとおり、「第一篇　現相的世界の四肢構造」、「第二編　省察的世界の問題構制」、「第三編　事象的世界の存立機制」の三部構成をとっている。この三部構成が、(感性論)概念論、判断論、推理論という、またしても古典形式論理学からカントさらにはここではヘーゲルにまで継承される枠組みを継承していることについては、すこし気をつけてみればだれしもが気がつくところだろう。もちろん、ここでも周到な換骨奪胎の戦略がめぐらせての上であることはいまさら言うにもおよばないことなのだが。」572P

「『存在と意味』全三巻の構想の基底が第一巻において置かれているというさきに見た事情に似て、より微視的にこの第一巻内部の構成について見ても、右の全三篇のうち最初の第一篇が全体の発想の基本形を定めていることは、そうおもって見れば見やすいところである。そこでは、主観—客観の二元論や、あるいは意識対象—意識内容(心像、表象等々)—意

識作用という「三項図式」にかわるべき、廣松のかねてからのキー・コンセプトである「四肢(的)構造」が、知覚をはじめとする人間と世界の原初的なかかわりの場面に即して懇切に叙述されているからである。」573P
「この「四肢構造」は、大方の読者にはあらためての説明も不要かとおもうが、念のためにいっておくとすれば、主観(意識作用) —客観(意識対象)のそれぞれの側を二分して、意識内容(心像、表象等)をいわばそれぞれの側に分属させ、こうして、主観、客観いずれをも脱物象化、脱実体化し、あわせて、意味内容の脱観念化をはかるという戦略に発する概念である。(『存在と意味』という標題にこめられた著者の意図は、このように見てくると一層鮮明になるだろう。)」573P
「主観—客観それぞれの側を二分するとは、具体的にいえば、そこに「として」構造を導入して、いわばその実体性を流動化することにほかならない。共同主観(われわれ)「として」の(その契機を欠いては存立しえない)わたし、普遍者(類、種)「として」の(その契機を欠いてはそれとして存立しえない)対象。そして、まさにこの二つの「として」構造を体現し、また両者を媒介する位置に立ち(それゆえに従来の構図では物象的、実体的存在をもちえぬと見なされる)意識内容(心像、表象)。廣松の読者には先刻ご承知の「〜として」(アルス・エトヴァス)構造が、こうして見ると(テロリストがさりげなく隠しもつ小型爆弾にも似て)きわめて巧妙かつ強力な「脱構築化」装置としてはたらいていることがあらためてはっきりするのではないだろうか。本当に強力な破壊力を持つ概念というものは、概してこのように目立たぬ顔をしているもののようだ。」573P
「「第二編　省察的世界の問題構制」は、外界と内界、物と心の分離とそれぞれの物象化、実体化、それにともなう「三項図式」の成立を批判的に跡づけ(脱構築し)、前述のように、(心の主要なまた高等なはたらきと見なされる)判断のありかたについて、従来の諸説が批判的に検討される。ここでは、既述の新カント学派のかずかずのそれなりに精緻な判断論のみならず、廣松がかねて興味を寄せ評価してもいたボルツァーノやマイノングらの諸説が直接あるいは暗黙に参照され、批判的な位置づけを得る。先にも述べたように、問題系としては、廣松の最初期からの関心の中心を占めてきた領域にあたり、それだけに一際力がこもるところである。」574P
「「四肢構造」とならんで「関係の一次性」を説き、したがって「概念の函数的性格」を強調する廣松にすれば、当然概念と判断の区別は相対化・流動化される(ついでにいえば、概念と推理あるいは推論との区別も相対化・流動化される——この点に限っていえば廣松はヘーゲルの徒である)。こうした思考の文脈のなかから、あらためて意味の網の目の結節点としての概念と判断の位置があきらかにされ、あるいはまた、たとえば、判断の「超文法的主語」の概念を導入することによって、判断概念の流動化・相対化がはかられる。このようにして、かねて開拓に努めた判断の理説が、第一篇ですでに提示された四肢構造論のなかにいわば的確に積分されて行くのである。」574P
「「第三編　事象的世界の存立機制」は、以上に述べた第一篇、第二編での考察をふまえて、主観—客観から中立な「事象」(こと)の共同主観的存立のありようをあきらかにして行く。廣松のいう「事的世界観」の全容を明確に提示する部分として本書の締め括りにふさわしい重みをもち、また『存在と意味』全体から見ても、議論の中枢をなす部分として構想さ

れていたとおもわれる。全体は、見られるとおり、主として空間・時間の問題をあつかう第一章(もちろん、空間・時間を主観の形式とするか、客観の形式とするか、というカント以来の議論との対決が志向されている)、「事の物象化と実体主義的錯視」をあらためて取り上げて、いわば客観概念の相対化・流動化に仕上げを施すことを目差す第二章、事象の間主観的存立の様相をあらためて見定め、それが客観的存在性と両立不可能なものでない所以を解明して、「能知と所知の不二性」という事的世界観の極みにまで導く第三章、以上の三章構成で書かれている。」574-5P

「ことさら推理や弁証法の問題を強く言い立てることはないとはいえ、「関係」の網の目をほかならぬ主観—客観のかかわりにまでひろげて「事象」の成立の様相を追求するこの第三編が、古典形式論理学やカント、ヘーゲルの哲学体系の概念論—判断論—推理論の三部構成の頂点に位する「推理論」に相当するものとして構想されていることは、さきにもすこし述べたとおり、だれの目にもあきらかなところだろう。「推理」とは、もと媒介の論理にほかならず、廣松は、それをここでいわば「関係(づけ)」の論理一般にまで拡張した。ここに古典的な弁証法の論理が見当らないと非難するひとがいるとすれば、それは相対性理論のなかに(その特殊な部分系として)古典物理学が隠されていることを見落としてそれを難ずるひとと選ぶところがないのである。」575P

「さて、以上ごく手短に概観した『存在と意味』第一巻の論述に関連して、ここで是非とも触れておきたいトピックが二つある。ひとつは、ノミナリズム(唯名論) —レアリズム(実念論)の問題(いわゆる普遍問題)と廣松の立場との関係であり、いまひとつは、それと密接に関連する事柄とした、「個体」の問題の廣松哲学における位置づけの如何という問題である。」575P

「第一のノミナリズム—レアリズム問題に関しては端的に、『存在と意味』第一巻にすこし先立って刊行された著作中のつぎの一節を見ていただくのが早道だろう。／「それというのも、「イデアールな“存在”」というまさにプラトン的なイデア、ないしは、中世スコラの実念論(概念実在論)に謂う「普遍」[実在としての「類」とか「種」とか]と“近縁な”“形而上学的存在”を断乎として認めないところに、近代哲学・近代思想の立場性、近代合理主義的立場性が存するからである。われわれは、勿論、形而上学的存在の実在性を認めない。それは物象化的錯認の所産であって、決して真に実在するものではない。がしかし、錯認において形而上学的存在とみなされてしまうごとき対象性が現に“ある”ことは無視できない。近代合理主義は、「形而上学的実在」という錯認の生ずる機制を正しく把握し得ず、謂うなれば“恐怖にかられて”ひたすら“形而上学的存在”という“影”から目をそむけ、何かといえば「形而上学！」というレッテルないし呪文をなげつけて“保身”したつもりになっていた。」（『もの・こと・ことば』）[本著作集第一巻四六一頁]」575-6P

「廣松は、「普遍(概念)」の実在性を否定するノミナリズムにも、またその一種として(コントからウィーン学団にいたる)実証主義を典型とする「近代合理主義」にも同じることがない(「何かといえば「形而上学」というレッテルないし呪文をなげつけて“保身”したつもりになっていた」という生々しい言い方には、何やら具体的に思い浮べている筋がありそうでもある)。かといって、また、廣松が実念論(概念実在論)の立場に与しないことは、引用中のわれわれは、勿論、形而上学的存在の実在性を認めない」云々のくだりによってあ

きらかである。」576P
「廣松は、ただ、(「普遍」という)「対象性が現に“ある”ことは無視できない」と端的にいうだけである。この立場を、それではなんと呼ぶべきだろうか。歴史上に先蹤（*せんしょう*）はあるのだろうか。わたくしに多少の見通しがないわけではないが、いまは、ここでも、廣松が、ノミナリズム—レアリズムという二項対立を根底から流動化・相対化する視点を見事に確保しえていることだけを指摘しておくにとどめよう。」576P
「廣松が「普遍(概念)」の実在性を否定するノミナリズムに同調しないということは、第二の問題、すなわち「個体」に関する廣松の見方にただちに関係してくる。いうまでもなく、ノミナリズムは、普遍の実在を否定する反面で、個体のみを実在として認めることにおいて成り立つと通常見なされるからである。普遍という対象性が“ある”ことは無視できない、とする廣松は、当然ノミナリズムの個体実在論にも同調することがない。」576-7P
「たとえば、本書『存在と意味』第一巻にもつぎのような一節が見られる。／「われわれは“個体的分節相”で現前する“性質複合体”(正しくは「関係の結節態」)であれば、臆することなくそれに“個体性”“個体的持続性”“個体的自己同一性”を認容しうるのである。」(第三編第二章四七六頁)」577P
「「事的世界観」を採って、従来一般の「物的世界観」をしりぞける廣松の思考において、このように、「個体」の概念が流動化・相対化されることは、考えてみればあまりにも当然のことかもしれない。」577P
「ここでは、ただ、この「関係の結節態」という個体観が、「自己分裂的自己統一」の相においてある「わたし」あるいは「ひと」という人格観ないし人称観に連なってくること、そして、このことが、社会—個人のかかわりの問題に多くの見通しをもたらすことだけを指摘しておこう。」577P

5

「今回あらためて読み直してみて気がついたことだが、廣松は、この『存在と意味』第一巻では、「共同主観性」よりも「間主観(性)」の用語のほうを表に立てて使っている。もとよりこの二つの語は、廣松においてはほぼ同義なのだが、あえて「主著」でこの挙に出るについては、単にこの第一巻が「認識」の問題を主題とするためとばかりはいえぬ事情があるいはあったのではないかと、わたしは推測する。／「共同主観性」といってしまうと、あたかも個々人にその可能性を十分に発揮した自己同一性の実現を許す共同体が現にあるいは間近にあるという幻想を与えかねない。それを避ける意味は多少はこめられていたかと推測するのである。廣松は、もちろん、そうしたコミュニタリアンではなかった。／むしろ、根底では、個人のイニシャティヴと独自性を誰よりも念じまた尊重しており、現ある社会が自己に課してくる同一性の枠をいつも何ほどか居心地悪く感じることをいわば原動力として生き、思索していた。彼の心くばりを含羞も、ときには鎧をおもわせる文体も皆そこに由来するようにわたしにはおもわれる。」577-8P・・・*解説者の近代合理主義的な観点での廣松の「誤読」？*

「解題　小林昌人」(『廣松渉著作集 15　「存在と意味(１巻)」』岩波書店 1997)

廣松さんの文献的なことを担当・展開している小林昌人さんが、この『著作集』の解題

を全部担当しています。これは、『廣松渉著作集 15 「存在と意味(1巻)」』総体の「解題」で、ここには「著作目録」「年譜」の「解題」も含まれます。ここは、『存在と意味』の読書メモなので、別の機会(たぶんそこまで書く機会はないとも思いますが)に取り上げることにして、ここでは、『存在と意味』第一巻分の「解題」をとりあげます。**太字**で見出しがついている項目が二つ、「『存在と意味――事的世界観の定礎』第一巻「認識的世界の存在構造」」と「『存在と意味』の諸プランについて」。

『存在と意味――事的世界観の定礎』第一巻「認識的世界の存在構造」

ここでは、この本が極めて専門的な本なのに、かなり評判になって売れて刷を重ねたことと、廣松さん自身がいかにこの著についてこの本の出版以前にこの著を予告・紹介していたか、そして校正の作業について書いています。

そして、出版後のインタビューの紹介や出版後におこなわれた鼎談における廣松さんの発言が書かれています。切り抜きメモを残します。

「本書の刊行に際しても山本啓氏によるインタビュー「理論的実践への飛翔――新著『存在と意味』をめぐって」(「日本読書新聞」八二年一一月一日号)、及び高橋順一氏によるインタビュー「近代知の地平の超克に向けて――『存在と意味』を刊行する廣松渉氏に聞く」(「週刊読書人」一一月一日号)が行われている。本書第一巻に対する著者自身のコメントや、第二巻、第三巻の構想も語られており、本書の理解を大いに助けるものであるが、紹介の紙幅を欠くここでは参照を求めるにとどめておく、しばしば寄せられる“疑念”を払拭する一助として、ここでは、本書刊行後に行なわれた足立和浩、山本信両氏との鼎談「『存在と意味』をめぐって――近代をのりこえる哲学」(「東京大学新聞」八三年二月八日号)での発言を紹介しておこう。

> 「カントを連想させるような古くさい三部構成という点について弁明しますと、私の場合能力心理学的な三分法とは関係がありません。第二巻の実践世界というのは、カント流の実践哲学、倫理学とは違いまして、むしろ、社会哲学というか歴史哲学に近いものになります。第三巻も、新カント学派の文化哲学とは様子が別になります」。
> 「認識論を先立てておくという姿勢ではたしかにカント的ないしはさかのぼってロック的になっていると自認します。しかし、私の場合、認識能力の批判的吟味でもなければ、既成科学の認識論的基礎づけでもない。まさに「存在＝認識」論なんですね」。
> 「認識論的世界論というかたちのものを第一巻として先行させるのは二つのモチーフがあってのことです。一つには、世界観的なパラダイムの転換期においては即自的に胚胎している新しいパラダイムを対自化しつつ、それを定式化することが哲学の課題となるはずで、この仕事はさしあたり認識論的な作業として先行的な要件をなしているという自己了解です。二つには、実践的有意義性を帯び文化的価値性を帯びている如実の世界にやみくもに切り込むのは困難だし、実践的世界・価値的世界を学理的に分析するためにも、まずは認知的な射影相で截った世界現相を暫定的に把握しておくという手続きが前梯的な作業になるという思いです。(『廣松渉コレクション』第六巻、忽那敬三編「知のアクチュアリテート」三〇一―二頁)。」381-2P

『存在と意味』の諸プランについて

これは一巻の廣松さん自身のこの本の諸プランについて書かれています。どう構想をね

っていたか、ということで、未完の二巻、三巻の構想とどう連携していくかに参照になり、誰かが未完分の発刊を試みるときに、参照できるのではないかと思いますが、とても、そんなひとが出てくるとは思えもしないのですが・・・。

(編集後記)

◆月二の発刊態勢、少なくとも今年一杯は続けます。

◆巻頭言は、ずっと前に書き上げていて、時事に合わせた原稿を挟み込んでいて、ずっと先送りしていました。既に、内容的には書いていることですが、更めて、「障害関係原論」の「はじめに」に当たる文として出しておきます。まとめるときに、全面改稿することになるかもしれない、試論的な文です。

◆読書メモは、『存在と意味』第一巻の最終回です。読書—メモ取りは既に第二巻第一篇第三章に入っています。

◆廣松さんの『存在と意味』第一巻、全面的打ち込みをしていたのですが、きっと何をしているのだろうと、思われたひともおられるとも想っています。廣松さんの本は、初期の頃は、哲学的なところの基礎も、外国語の基礎もない中で、図書館で脇に何種類もの辞書をおいて読んでいました。その他、そもそも学問一般の基礎的な文献も読んでいない中で、その引用的なことが出てくると、必要となればその文献も読もうと想いつつ、判らない処は、後でその文献に当たるところで判明していくとして、読み飛ばす手法も身に付けて、アバウトに摑んでいっていました。そうすると、「難解な」と謂われる廣松さんの本がどんどん読み進め得るのです。ですが、そうすると、これは廣松さんの本に限らないのですが、記憶が苦手なわたしは、頭に入っていかないのです。それで危機感を覚え、読書メモを遺し始め、それで、とうとう、『存在と意味』だけはと、全面打ち込みに入ったのです。打っていると、廣松構文のようなことや、頭の体操的なことにもなって行っていて、自分の文を書くときにも、打ちながら文の構案が浮かんでいくことにもなっています。ただ、そもそも何のためにわたしが本を読み文を書くのかというところでは、その主旨に戻って、自分の宿題に早く戻る必要があるのです。多分、廣松学習は、わたしの思考力からして、「壮大な無駄」となってしまうのでしょうが、無駄と謂われることの中に、何か意味があるのだろうとも念ったりしています。

◆トランプ政治は「チキンのブラフ政治」と言われています。「何をするか判らない」というところで、恐れを生みし、言うことをきかせる、としているのですが、その手法は、自分と同じ、もしくはそれ以上のファシストたちには通じませんし、自らの意志をしっかりもった政治家にも通じません。日本のように力の強い者への追従政治している者に有効なだけのブラフ政治です。そもそも、何をしようとしているのか、その政治に一貫性がない、思いつき政治です。力を見せつけ、他者を屈服させることに生き甲斐を見出すような、自国ファースト・自分ファーストの政治です。結局何もできないか、やれるとしたら、何かのはずみで世界を破滅させることだけです。民衆の国際連帯の中で、包囲網を作り、その政治を無効化させるしかないのです。

反障害－反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られていますが、そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくならない」とか「社会の基本構造は変わらないという意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

E メール　hiro3.ads@ac.auone-net.jp　(三村洋明)
反障害―反差別研究会　HP アドレス http://www.taica.info/
「反障害通信」一覧　http://www.taica.info/kh.html
反差別資料室 C　https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3
ブログ「対話を求めて」http://hiroads.seesaa.net/
反差別資料室Ａ　https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1